

# 御身

横光利一

青空文庫



末雄が本を見ていると母が尺さしを持って上つて来た。

「お前その着物をまだ着るかね。」

「まだ着られるでしょう。」

彼は自分の胸のあたりを見て、

「何なぜ？」と訊きき返かえすと、母はやはり彼の着物を眺めながら、

「赤あか子のお襠むつ褌つにしようかと思うて。」と答えた。

「赤子って誰の？」

「姉さんに赤子が出来るのや。」母は何なぜだか普通の顔をして

いった。

彼は姉にそんなことがあるのかと思うと、何ぜか顔が赧あからんだ。しかし、全く嬉しくなった。

「ほんとうか？」

「もうその着物いらんやろ。代りのをこし作らえてあげるでほど解ほどこうな。」

「ほんとうに出来るのか。」

母は答えずにそのまま下へ降りてしまった。彼はちよつと腹が立った。が、その腹立たしきの中から微笑がはみ出るように浮んで来た。いくら顔をひき締めてみても駄目だった。

彼と姉とは二人姉きょうだい弟だいで、姉は六年前に人妻になっていた。

それにまだ子供は一人もなかった。

二

晴れた日、彼は山を越して姉のおりかの家へ行つた。赤子のこ  
とを訊きくのが羞はずかしかったので黙つて時々氣付かれぬように姉の帯  
の下を見た。しかし、彼の眼では分らなかつた。ただ何となく姉  
は生々としていた。姉は間もなく裏の山へ行こうといひ出した。  
二人は山へ来ると蘚こけの上へ足を投げ出して坐つた。真下に湖が見  
えた。錆さび色いろの帆が一点水平線の上にじつとしていた。深い下の  
谷間からは木を挽ひく音が聞えて来た。

「ボケを一本ひいて帰ろ。もう直じき花が咲くえ。」

姉はそういいながら立つて雌めまつばやし松林の方へ登つていった。彼はひとり長々と仰あおむ向きに寝て空を見ていた。長い間姉と二人でこういう所へ来てこういう風に遊んだことはなかつた。彼は姉がたいへんに好きであつた。

「こいつ、堅かたいわア。」と姉の声が頭の上でした。

彼が振り返つて姉の方を見ると、姉は丁度躑つっじ躑をひき抜こうとしている。両りょうひじ肱を下腹にあてがつて後へ反そり返かえろうとしている所であつた。彼は姉の大切な腹の子供に気がついて跳ね起きた。

「よせ。」

彼は馳かけていって姉を押しのとんと自分でその躑躑をひいてみ

た。根はなかなか堅かった。

「堅いやろ。二人かかるとええわ。」

そう姉はいつてまた躑躅に手をかけようとした。

「行こう行こう。」

彼が姉の手を持ってもとの所へ戻ろうとすると、姉は未練そうに後を見返りながら、

「もうじき綺麗な花が咲くえ。あれ餅躑躅え。葉がねばねばするわ。ああしんど。」といった。

彼は姉の下腹を窺った。躑躅をひくときの姉の様子を浮かべると、肱で子供が潰されていそうに思えてならなかった。しかし、それをどうして吟味してよいものか分らなかつた。姉に訊いてみ

ることも羞しくて出来ないし、これは困ったことになったと彼は思った。

姉は足もとの処でまた一本小さな躑躅を見つけると、

「末っちゃん、これなら引けるえ。」といってその方へ寄りかけた。

「うるさい。」と彼は叱った。

「たまに来たのに一本ぐらい引いて帰らにやもつたいない。」

「もう帰るんだ。」

「もう帰るん？」姉は彼の顔を見ると、

「何アんじや。」といって笑い出した。

彼は黙ってさきになつて歩いた。実際彼には姉の腹のことがひ

どく気になり出した。もうそれ以上遊ぶ気がしなくなった。

「お腹すかないか。」

と彼は不意に姉に訊いてみた。空すいていると答えれば、幾分か  
臑で腹の子供を押し潰したそれだけ空すいているのだとそんな他愛  
もない考えから訊いたのだが、姉は空すかないと答えた。しかし無  
論その答えだけでは承知が出来なかつた。

「俺おれはちよつと腹が痛いんだ。姉さん処さの昼さの肴さかなが悪わるかつたん  
じやないかね。姉さんは？」

と彼は訊たずねた。

姉は顔を顰しかめるようにして彼を見ながら、

「私うちどうもないえ、ひどう痛むの？」と訊き返した。

姉も痛むといえ、また姉の腹部の子供に触りさわが出来ているにちがいないという考えから、彼はそういうかけひきで訊いたのだ。ところが姉の腹は痛んでいなかった。少し安心が出来かけるとまた親の腹部の感覚と子供の感覚とは全く別物だと気がついた。親の腹が痛くなくとも子の身体は痛んでいるかも分らなかつた。もう医者には姉の腹を見せるより仕方がないと彼は思った。しかし、見せるとすればまたどうしても一度は彼の心配の仕方を姉に話さなければならなかつた。これが彼には羞しくて厄やっかい介かいだつた。正式な結婚で姉は人妻になっているとはいへ、とにかくいずれ不行儀な結果から子供が産れて来たにちがいない以上、それをお互に感じ合う瞬間が彼にはいやであつた。彼が黙っているので姉も黙

っていた。

「まだ痛い？」と姉は暫くして訊いた。

「もういいんだ。」

「降りたら薬屋があるわ。小寺さんなら近いし。痛い？」

小寺さんとは近くの医者の名であった。

「もう癒なつたよ。」と彼はいうと、

「それでも診みてもろうておく方がええやないの。」と、今度は姉から彼に医者すすめ出した。

彼は聞かぬ振りをしてどしどしと山を下った。

四月には彼は東京にいた。女の子が生れたという報知しらせを姉の良お人つとから受け取ったのは五月であつた。

「しめた！」と彼は思つた。そして、今まで誰にもいわずに隠かくしていた不安は、全く馬鹿氣たことだつたのだと思つて可笑おかしかつた。

「やつと叔父おじさんになつたぞ。」

そう思うと彼は文句なしに人間が一段豪えらくなつたような氣がした。

六月に末雄は帰省した。彼は姉の家へ着くと直ぐ黙つて上ろうとした。が、足が酷く汚れていたので膝ひざで姪めいの寝ているらしい奥の間の方へ這はい出だした。黄色い坐蒲団ざぶとんを円まるめたようなものが見えた。

(いるいる。小つぽけな奴だ。)

彼はにたりと笑いながら姪の上へ蚊帳かやのように被かぶさつた。

(待て、こりや俺に似とるぞ。)

彼は姪の唇を接吻した。つるつる滑すべる乳臭い唇だ。姪は叔父を見ながら蝸牛かたつむりのような拳こぶを銜くわえようとして、ぎこちなく鼻の横へ擦すりつけた。

(こ奴いっ、俺そつくりじやないか。)

彼は不思議な気がすると、笑いながら、俺の子じやないぞと思つた。

(よし。一人増した!)

彼は何かしらを賞ほめてやりたかつた。これこそ俺の味方だ、嘘うそではないぞ、と思つた。

姉のおりかは笑いながら晴れやかな顔をして縁えんがわ側から上つて来た。

「何時の汽車、二時？」

「こ奴俺に似とるね。似てないかね。」

おりかは娘を見下みおろすと、黙って少し赧あかい顔をして肩たすきから襷たすきをは

ずした。

「ね、似とるよ、何っていう名だね？」

「ゆきっていうの。」

「ゆき？」

「ゆきむら幸村の幸ゆきっていう字。」

「さいわいか？」

「そやそや。」

「あんな字か、俺ちゃんと考えといてやったんだがな。辞じびき引ひ

っぱったのやろ？」

「漢和何とかいうの引いたの。末っちゃんに考えてもらえつて私うちいうたのやけど、義にい兄さんったらきかはらへんのや。いややな

アそんな名？」

「こりや可愛いかわい子だ。俺に似るとやっぱり美人だな。」

「そうかしら、お風呂で芸者はんらがな、こんな可愛らし子ど  
うして出来るのやろいうて取り合いしやはるのえ。」

「いい子だよ。苦労するぜ姉さんは。」

末雄は姉を見て笑うと、急に自分のませた態度が不快になった。  
彼は立って井戸傍いどばたへ足を洗いに行つた。それから疲れていたので  
姪の傍にくつついて寝たが、姉が見ていなかったので姪の手を引  
っぱったり鼻をつまんだりしてなかなか眠つかれなかつた。

彼は遠くで赤子の泣き声のしている夢を見て眼が醒めた。すると、傍で姪が纏れた糸を解くように両手を動かしながら泣いていた。

「アツハ、アツハ、アツハ、アツハ、アツハ、アツハ。」

そういう泣き方だ。彼は前に読んだ名高い作家の写生的な小説の中で、赤子の死ぬ前にそれと同じ泣き方をする描写があつたのを思い出した。彼は不安な気がして姉を呼んだ。姉はいなかった。で、姪を抱き上げて左右に緩く揺つてやると直ぐ泣きやんだ。

「死ぬのじやなかった。」

そう思つて彼は静に寝かしてやると、また、「アツハ、アツハ

。」と泣き出した。彼はまた抱き上げた。するとやはり泣きやんだ。こんな同じことを辛抱強く四度ほど繰り返すうちに、もう彼は面倒臭くなって来て、身体に力を籠めながら欠伸を大きくした。姪は腹のあたりを波立たせて、「アツハ、アツハ。」と泣いた。彼はいらいらして来た。が、姪はしきりに泣き続けた。

「泣け泣け。」

彼はじつと憎々しい気持ちで姪を眺めながらそういった。が、その中にもうとても溜らなくなつて来た。彼は竊そツと姪の黄色な枕の下へ手を入れて彼女の頭を浮き上らせると、姪はびたりと泣きやんだ。彼は姪を抱き上げてやる気はなかつた。で、にたりと笑いながらまた静に手放すと、彼女は前より一層声を張り上げて

全身の力で、「アツハ、アツハ、アツハ。」と泣き立てた。

彼はうまい手を覚えたつもりでもう一度それを繰り返そうとした。が、ふと、幸子<sup>ゆきこ</sup>は生れて今初めて瞞<sup>だま</sup>されたのではなからうかと思つた。

（その最初の瞞し手がこの叔父だ。）

そんな風に考えると、彼は自分のしたことがそう小さいことだとは思えなくなつた。彼は姪を抱き起した。そして、謝罪の気持ちで姉が帰つて来て乳を飲ませるまで抱き通してやつた。

次の日、山越しに彼は家へ帰った。

「まあ昨日きのう帰ると思うていたのえ。お寿司すしこしらえといたの腐つてしもうた。」

そういつて母は盥たらいに水をとつてくれた。

「昨日着いたんだけれど、一日姉さんとこの小女こめと寝転んでいた、あの小女は可愛らしい顔をしていますね。」

「それでもお臍へそが大きいやろ。あんまり大き過ぎるので擦すれて血が出やへんかしら思うて、心配してるのやが、どうもなかつたか？」

「そうか、そんなに大きいのか。」

彼は足を洗いながらある女流作家の書いた、『ほぞのお』とい

う作の中で、えいじ 嬰兒の臍から血が出て死んでゆく所のあつたのを想い出すとまた不安になって来た。

「そんなことで死んだ子つてありますか？」

「あるともな。」

「死にやせぬかな了。」

母は黙っていた。

「どうしたら癒なおるんだらう、お母さん知りませんか。」

「私うちおりに二にせんだま錢丸を綿で包んで臍の上へ載せて置けつてい

うといたんやが、まだしてたやろな？」

「ちつとも見ない。」

「そおか。う——んと気張ると、お前の胃みたいにごぼごぼお

臍が鳴るのや。お前胃はもうちよつと良うなつたかいな？」

彼は足を洗つてしまつたのに、まだ上りあが框かまちに腰を下したまま盥の水を眺めていた。暫しばらくして、

「死にやせぬかしら。」とまたいった。

「どうや知らぬわさ。お前髪をシユウツととき付けたらええのに、瘦やせて見えて。」

母はちよつと眉を寄せてそういうと盥の水を捨てに裏の方へ行つた。

彼は気が沈みそうになると、

「くそツ死ね！」といつて一度背後へひっくり返つてから勢よく立ち上つた。

## 七

幸子の臍はその後だんだん堅まっていった。初め彼の見た時には、腹部を漸く包んだ皮膚の端を大きくひねって無雑作むぞうさにまるめ込んだだけのように見えた。そして、彼女が泣く時臍は急に飛び出て腹全体が臍を頭としたヘルメツトのような形になってごぼごぼ音を立てた。それはいつ内部の臓はらわたが露出せぬとも限らぬ極めて不安心な臍だった。それにおりかは割りに平気であつた。ある時彼は姪の臍の上に二錢丸の載っていない所を見付けた。彼は自分の読んだ書物の中で、そのような臍は恐るべき命いのちとりだと医者か

いつていたということを、巧妙な嘘を混じえて姉にいいきかして嚇おどかした。

「そうかしら。」

そう姉はいうとちよつと笑つて、

「死ぬものか、これ見な。」といつて娘の臍をぽんと打つた。

「馬鹿。」と末雄は笑いながら睥にらんだ。

するとおりかはまた二、三度続けさまに叩いてから、「ちよつと指を入れとおみ。」といつた。

彼はふと弄いぢつてみる氣になつて、人差指で姪の臍の頭をソツと押してみた。指さきは何の支えも感じずに直ぐ一節ひとつしほど臍の中に隠された。それ以上押せば何処どこまででも這はい入りそうな氣がして

ゾツとすると、

「いやだ。」といつて手を引つこめた。

しかしこんな不安は間もなくとれた。そして、或る日おりかは彼に幸子が笑い出したと嬉しそうにいった。

見ているとなるほど時々幸子は笑つた。それは何物が刺戟しげきを与えるのか解らない唐突とうとつな微笑で、水面へ浮び上つた泡のように直ぐ消えて平静になる微笑であつた。しかしまたその微笑を見せられた者は、これは人生の中で最も貴重な装飾だと思わずにはいられない見事な微笑であつた。

夕暮、人の通らない電車道の傍でにわとり鶏にやるはこべを捜している  
と、男の子が一人石を蹴けりながら彼の方へ来た。彼はその子の家  
に黒い暖簾のれんが下っていたのを思い出して、誰が死んだのかと訊い  
た。男の子は黙っていた。

「だれが死んだのや。」

ともう一度訊くと、

「赤あか子や。」と答えた。

「ふむ赤子か、どうして死んだ？」

すると男の子は羞しそうな顔をして馳かけ出だそうとした。彼は男  
の子の手首を素早く握った。

「なアどうしてだ、うむ、いったら豪いぞ。」

が、男の子はやはり答えずに彼の握った手を振り放そうとして口を歪めた。

彼は少し恐い顔をして手首を放した。男の子は逃げもせずそろそろと電车道まで来ると、レールの上へ跨がって腰を下ろした。

彼はその方を向かないようにして草の中に蹲んでいると、男の子は向うから、

「教えてやろうか、なア？」といい出した。

「アア教えてくれ、どうして死んだんだ？」

男の子は硝子の破片でレールの錆を落しながら暫く黙っていてから、

「いやや。」とまたいった。

彼は男の子を黙って見詰めていた。すると、

「お母アが乳で殺さはったんや。」とその子はいった。

「乳でってどうしてだ？」

「あのな、昼寝してて殺さはったんや。」

彼には全く何のことだか解らなかつたので子供の顔を見続けた。男の子は何<sup>な</sup>ぜだか眩<sup>まぶ</sup>しそうな顔をしてちよつと彼を見上げると、急に向うの方へ馳け出した。

暫くして彼は、男の子の母親が赤子に添い寝をしていて乳房<sup>ちぶさ</sup>で鼻孔<sup>びこう</sup>を閉<sup>へい</sup>塞<sup>そく</sup>させたのだと近所の人から教わつた。そんな殺し方は彼には初耳だつた。が、なるほどと思つた。それから急に彼は

姉の乳房が気になり出した。

次の日彼は姉の家へ出かけて行くと言うと直ぐそのことを話した。

「そりや死ぬわさ。ようあることや。」と姉はいった。

「知つてたのか。」

「そんなこと知らんでどうする、末っちゃんあては私を子供見たいに思つてるのやな。何んでも知つてるえ私うちら。」

そういつて姉は笑つた。彼は少し安心が出来た。が、その直ぐ後で姉は、幸子と三日違いに生れた隣家の赤子が三日前に肺炎で亡くなつたということや、久吉の友人の赤子も今肺炎にかかつていてもう医者に手を放されたということを話した。

「やれやれ。」と彼は思つた。生き続けて大きくなつてゆくと

いうことは、よほどむずかしいことのように思われて気が重苦しくなつてしまつた。

二、三日してから彼は上京した。上京する時ちよつと姉の家へ寄ると、久吉の友人の赤子がとうとう死んだと聞いた。彼は淋しくなつた。縁側に立つてみると、隣家から赤子の回向えこうの鉦かねの音が聞えて来た。初秋の涼しい夜だ。すると、

「昔丹波たんばの大江山おおえやま。」と子供の歌う声がして、急に鉦はそれと調子を合せて早く叩かれた。

「阿呆あほうやな。」と直ぐ母親らしい叱る声が出た。

彼がこちらで笑い出すと、おりかも何処か暗い処で笑い出した。

## 九

次の春の休暇に帰って彼が姉の家へ着いた時、幸子は彼の母の膝の上で、一枚の新聞を両手で三度に引き破っている所だった。

「ソラ。」

彼は玩具おもちゃの包みを炬燵こたつの上へ置くと、自分も母や姉のように蒲団ふとんの中へ足を入れた。母は包みを解いて中からセルロイドの形を出した。

「そうれユウちゃん。兄さんがな。」

「兄さんやない叔父さんやはな了。」と姉は幸子を見ていった。「アそかそか、叔父さんがな、遠い所でこんなにあえ物買こうて

来ておくれはった。アーええこと、ソーラ。」

彼の母が人形を差し出すと幸子は祖母の顔と人形とを暫く交りしばらかわ番ばんこに眺めていてから、そろそろと人形の方へ手を出した。

「あの顔。」といつておりかは笑った。そして、自分でまた別の猿の頭をゴムで作った小さい玩具を出して幸子の鼻の前へ持つていった。

「そうれユウちゃん、こんどは猿えてさん。」

するとおりかは猿の頭を押したと見えて、猿の口から細長い袋になつてゐる赤い舌が飛び出した。幸子は眼をパチパチさせて反そり返かえつたが、頭が母の胸で止めとられると眼をつむつて横を向いてしまった。皆が笑った。が、彼は疲れていたのでひとり恐こわい顔を

して、

「大きゆうなつたね。」と一口言った。

「そう、大きゆうなつてる？ お母さん、ユウが大きゆうなつたつて。」

と姉は傍にいる母にいつてきかせた。

「そりや大きゆうなつてるわさ。」

「そうかしら、ちつとも大きゆうなつたように見えやへんけど、傍にいるでやな。」と姉は嬉しそうにいった。

二、三日して前に日向さきひゆうがへ行っている彼の父から母に早く来い  
と行って来た。母は孫の傍から離れてゆくのを厭いやがったがとうと  
う行くことになった。

出発の時、汽車の窓から首を出している彼女の前には、久吉と  
おりかと、おりかの肩から顔を出している幸子とそれから彼とが  
並んで立っていた。彼も皆も今別れれば何日いつまた会えるか解らな  
かった。

汽車が動き出した。

「バーゆうちゃん、バーア、行って来るえ。バーア。」

彼の母は孫の顔ばかりを見ていた。彼はもう母が自分の方を向  
くか向くかと待っていた。

おりかは片肩を歪めて幸子を前へ突き出すようにしたが、幸子は口を開いて汽車の動くのを眺めていた。

「バーア、ゆうちゃんゆうちゃん、バーア、行って来るえ、バーア。」

遂々母は彼の方を一度も見なかった。汽車が見えなくなると、彼は姉夫婦から離れて前に急に改札口から外へ出た。子よりも孫の方が可愛いらしい、そう思うと、その日一日彼は塞いでいた。

## 十一

休暇が終ると彼は上京した。その前日去年生れた赤子の種痘

を近日するという印刷物が姉の家へも配られた。久吉とおりは別に掛り医の所でさそうといっていたが、彼はそれさえも出来ることならさせたくなかった。何となく姪が汚なくなるような気がしたからだ。

二週間ほどして、姉から末雄の所へ来た手紙の中に、幸子は種痘してから五日にもなるがまだ熱がひかないので弱っているということが書いてあった。子供に種痘をすれば暫く熱が出ること位彼も知っていたが、それは五日も続くものだろうか、何か他の病気になったのではなからうかとそんな掛念けねんが起つて来た。姉の手紙の書き方が彼の想像を限定させないので彼は困った。そして、直ぐ容子ようすを訊き返した手紙の中に是非返事を直ぐ呉くれるようにと

書いて出した。が、返事は四日たつても来なかつた。彼は外から帰つて来る度に手紙が来ていないかと女中に訊いた。外へ出てゐる時にも、返事がもう来ているだろうと思つたと急に下宿へ引き返した。が、返事は一週間たつても来なかつた。彼は腹を立てて、

「どうにでもなれ。」という気を出そうと強いてつとめてみた。が、絶えず何かに脅かされているような気持ちでまた一週間待つた。その夜姉から手紙が来た。それは所々塗抹された粗雑な文字で、

「幸子は種痘から丹毒になりましたが、漸く片腕一本で生命が助かりました。」

とただそれだけが書いてあつた。

彼は片腕を切断された幸子が、壊れた玩具のように畳の上でごろごろ転っている容子ようすを頭に浮かべると、対象の解らない怒りが込み上げて来た。彼はペンをとって葉書へ、

「幸子を姉さんのような不注意者に与あずけて置いたということが、こんな罪悪を造ってしまったのだ。」

と書いた。書いている中うちに涙が出て来て、インクを次ぐ時壺の中へうまくペンのさきが嵌はまらなかった。

彼はその葉書を持って外へ出た。

「とうとうやって来た。」

彼は自分を始終脅かしていた物の正体を明瞭に見たような気持ちちがした。その形が彼の前に現れたなら必死になってとり組んで

やると思った。不思議な暴力が湧いて来たがしかしどうとも仕様しようがなかった。その中に幸子の大きくなつてから一生彼女の心を苦しめる不幸を思うと、もう彼は暗い小路の中に立ち停つてしまつた。

「俺の妻にしてやろう。」

ふと彼はそんなことを考えると、自分と姪の年の差を計つてみた。それから、自分の顔と能力とを他人に批くべた。

「何アに、俺に不足があるものか、必ず幸福にしてみせるぞ。」

他人の誰よりも俺は愛してやる。よしッ、何アに。」

彼はまた歩き出した。が、壊れ人形のような姪の姿がちらちらするとまた涙が出て来た。

「罪悪だ、実に馬鹿にしている、罪悪だ！」

彼は何か出張でばった石の頭に蹠つまずいて踉よろけた。

「糞くそツ！」と彼は怒鳴どなった。

蕎麦屋そばやの小僧が頭に器うつわもの物を載せて彼の方へ来た。彼はその

器物を突き落とそうとして睥にらみながら小僧の方へ詰め寄っている  
自分を感じた。小僧は眼脂めやにをつけた眼で笑いながら、

「ヤーイ。」というと彼の方へ片足をあげた。

彼は素通りした。三二さんげん間ほども行き過ぎてから、器物を落とさ  
れたときの間の抜けた顔をしている小僧が浮ぶと、彼は唐突に吹  
き出して笑った。と、笑いながら酔よっぱらい漢わいのように身体を自由に  
ぐらぐらさせて歩きたくなくて来た。自棄酒やけざけを飲みたくなくなった。

片腕のとれた姪を見る気がしなかつたので、もう彼は直ぐ来る夏の休みにも帰るまいと思つた。そして、日向の父にそのことを報しらせると、父からは直ぐ返事が来て、幸子が腕を切断したというのは何かの間違ひだろう、心配することはない、と書いてあつた。すると偶然その日義兄の久吉からも手紙が来て、幸子も毒が片腕に廻つただけで身体へ来なかつたため一命は助かり、今では元のように健全に這はい廻まわっていると書いてあつた。

彼は直ぐペンをとると、手紙を粗雑に書くのもほどがあるというような意味の怒つた手紙を姉に書き始めた。が、それも力抜けがして途中で止よしてしまつた。彼は重味のとれた怠惰たいたな気持ちでぼんやり庭の白躑躅しろつづじを眺めていた。それから暫くたった時、今

日はうまい物を腹いっぱい食べて銭を費つてしまつてやろうと思つた。寿司が第一に眼についた。

彼は下宿を出た。が、気持ちが悪か悪かして周章てばかりいた。人が一といっている時自分が二といっているようだ。何か禍ちをしそうな気がした。

## 十二

休暇になると彼は直ぐ姉の処へ歸つた。

幸子は一人表の間の格子の棧を両手で握つてごとごと揺つていた。彼女は二つだ。

「ゆき、帰ったぞ。」

彼が音高く姪の前へどんと坐った。姪は恐<sup>こ</sup>わそうな顔をして一つ棧を向うへ渡った。

彼は自分の長い頭の髪が恐く見えるのだと思つたので、帽<sup>ぼうし</sup>子を深く冠<sup>かぶ</sup>つて髪を隠すと前へいざり出た。

「こりや、さア来い。」

すると幸<sup>ゆき</sup>は少し周章<sup>あわ</sup>ててまた二つ三つ棧を向うへ渡つてから彼の方を振り向いた。

「うむ？ 何んだい。」

彼が立つて抱こうとすると、姪は棧を持ったまま叩かれた蟬<sup>せみ</sup>のように不意に泣き出した。彼はぼんやりとしてしまった。

## 十三

休暇中の彼の仕事は殆ど幸子の見張りのために費された。無論それは誰からも命令いいつけられた役目ではなかった。しかしそれにもかかわらず、幸子は不思議なほど彼に懐なつかなかつた。彼は顔をいろいろ歪ゆがめて彼女を笑わせたり、やり過ぎるほど菓子をやつたりしたあとで、もういいだろうと思つて恐こわ恐ごわ「御身よ御身よ。」といいながら彼女の手を握る。すると、幸子は直ぐ「ふん、ふん。」と鼻を鳴らせて手を引いた。そんな時彼は淋しい気がした。何か子供の直感で醜みにくいさを匂かぎつけているのではないか

と恐れることもあつた。

「俺はなるほどいけない奴だ、だけど俺はお前が可愛<sup>かわい</sup>くつての  
」

彼はそんなことを口の中でいいながら抱きたい気持ちを一慢し  
ていた。が、時々衝動的に抱きたくなることがあつた。

ある時いやがる姪を無理に膝の上へ抱きあげた。姪は初めの間  
反<sup>そ</sup>り返<sup>かえ</sup>つて鼻を鳴らしていた。彼はそれをも関<sup>かま</sup>わずだんだん力を  
籠<sup>こ</sup>めて抱きすくめてゆくと泣き出した。が、放してやれば直ぐ泣  
き止むらしい泣き方だったので放さないでいると、いよいよ悠長  
な本泣<sup>ほんな</sup>きに変つてきた。彼は前へ押し出してやった。幸はいかに  
も恐ろしい手から逃がれでもするよう<sup>よう</sup>に急いで遠くまで這い出し

てから、裸はだか体の膝ひざ頭がしらを二つ並べたませた格好に坐つていつまでも泣いていた。彼はもう一度抱いてやるぞという意を示してどつと身体を動かすと、彼女は泣き声を一層張つて周章あわてて後へすぎつた。

(俺のどこがそんなに嫌いなのだろうか、それに何なぜ此こゝ奴いつがこんなに可愛いのだろうか。)

彼は直ぐ友達へ出す葉書にこう書いた。

「愛くせものという曲くせもの者ものにとりつかれたが最後、実にみじめだ。何ぜかというと、われわれはその報酬を常に計算している。しかしそれを計算しなくてはいられないのだ。そして、何故計算しなくてはならないかという理由も解らずに、しかも計算せずにはいられ

ない人間の不必要な奇妙な性質たちの中に、愛はがっしりと坐つてい  
る。帳場ちやうばの番頭ばんとうだ。そうではないか？」

とにかく彼は幸子に触れずに終日見張りをしていなければなら  
なかつた。この仕事はなかなか神経を疲らせた。そうかといつて、  
姉が彼の番を信用して溜つていろいろの仕事にかかつている  
以上彼は姪を抛ほつておくわけにはいかなかつた。うかうか本に読  
み耽ふけつているともう彼女は母を捜そうとして壁を伝いながら危険  
な腰つきで縁えんがわ側あがや上り框かまちの端へ行き、「ぼア、ぼア。」といひ  
ながら見えない向うの庭の方を覗のぞこうとする。すると、彼は泣く  
のもかまわず室へやの中へ連れて来る。また出る。また連れ込む。こ  
んなことを一日に幾回となく繰り返す。全く彼は幸子と一緒にい

ると遊ぶことも出来なければ、自分の仕事も出来なかった。ただ彼女の見える室の中に坐つていらいらしながらぼんやりしているより仕方がなかった。時々それが耐えられなくなると、彼は声を張り上げて幸子の周囲を躍りながら呼吸おどの続く限り馳け廻つた。すると幸子は意味の通じぬことを口走つて上機嫌になる。彼がへとへとになつて仰向きに倒れて、「アーア。」という、彼女も同じように彼の横へ寝転んで、「アー。」という。しかし彼が少しでも手を触れると直ぐ泣き顔をして口をとがらして起き上る。

「御身よ、御身よ。」彼はただそういつて見ているより仕方がなかった。

彼は姉の家を去る時、もう此処ここへは帰るまいと思つた。

## 十四

しかし、次の夏またやはり彼は姉の処へ歸つてしまった。彼が姉の家へ着いた時誰もいなかったのので、一人茶の間に寝転んで本を見ていた。暫くすると姉が歸つて来て、幸子を背から下ろした。彼はいきなり幸福を感じた。

「そうら、あれ、誰あれ？」と姉はいつて彼を指差した。

幸子は顔を顰めて、彼を見ながらだんだん後へ退つてゆくと、上り框から落ちかけようとして手を拵げた。

「危い。」とおりはいつて幸子を受けた。

「知らんのかお前、あれ叔父ちゃんえ。」

幸子はおりかの肩へ手を置いてやはり彼を眺めていた。

「お前忘れんぼやな、あれ叔父ちゃん。」

「おい叔父ちゃん。」と幸子は真似た。

彼は何ぜだかはずか羞しい気がした。黙つて笑つてしていると、幸子はくるりと向うをむいて母親の襟えりの間へ顔を擦すり寄よせた。

## 十五

彼は自分の幸子に対する愛情の種類を時々考えて、

「俺は恋をしてるんだ。」とまじめに思うことがあつた。

彼のせめてもの望みは、幸子を一度、ただの一度でいいしつかりと抱いてやる、そして、彼女はぴつたりと彼に抱かれることだった。更にそれ以上の慾をいえば、いつでも彼の欲する時に彼女が彼に抱かれることだった。実際彼はこのことに苦しめられた。しかし、彼の受けた愛の報酬もやはり前の夏の休暇と同じように冷たいものであった。彼は幸子を憎く感じる日がだんだん増して来た。

「幸子はなぜ俺に抱かれないのだろう。」

と彼は姉たすに訊ねた時、姉は、

「お前あらっほいからや。」とひと口でいった。

しかしそんなことではなさそうだった。が、幸子は彼以外の男

にはそう親しみのない者にも温和おとなしく自分を抱かせる所から見ると、あるいはそうであるかもしれないとも思った。とにかく幸子の一番嫌いな者はこの叔父であるらしかった。そして、叔父の一番好きな者は幸子であった。

「俺はもう幸ゆきの守もりはこりこりだぞ。俺が傍にいるからと思つて安心されると困るよ。殊に俺のような男は信用されればされるほどお人好しになるからな。だけでもう知らないぞ、うるさい。」

こんな前置きをいつておいてもやはりおりかは彼を信用して仕事をした。信用されると彼もその気で愚痴ぐちをいいながら幸子の守をした。そして、彼女に触さわらないようにと欲望を耐えて、いろいろ顔を歪めたり逆立ちをしたりして、幸子を笑わそうと自分の自

尊心を傷つけた。彼女が笑うと、彼はいよいよ乗り気になって赤い顔をしながら本気に犬の真似をしたり、坂道を昇る自転車乗りのペタルを踏む真似をしたりしてはしゃいだ。が、途中で急に彼は不気嫌になって黙ってしまった。すると、幸子はひとり首を振り振りペタルを踏む真似をして、「チンチンチン。」といいながら室へやの中を馳け廻った。彼女にとっては、この叔父さんは全く壁に等しい代物しろものであるらしかつた。

「今に見ろ。」そう彼は幸子を見て独り言ひとごとをいった。



# 青空文庫情報

底本：岩波文庫「日輪 春は馬車に乗って 他八篇」岩波書店

1981（昭和56）年8月17日第1刷

1997（平成9）年5月15日第23刷

入力：大野晋

校正：しず

1999年7月9日公開

2000年4月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 御身

横光利一

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>